趣旨　第 1 セッション：東アジアの都市景観

第1セッションの共通テーマは“Urban Landscape in East Asia”（東アジアの都市景観」）である。都市とは何ぞや？と，都市の定義からここで話を始める必要はないが，都市とは地域の統治や行政の中心であり，また地域の経済と社会の中心でもある。東アジアにおいては，西アジア，ヨーロッパなどとは異なり，都市は統治の中心として「市」ではなく「都」を核にして発達してきた。その意味において「都城」という表現が東アジアの都市を語るうえで適当であると考える。

古代中国では，殷(商)・周の時代に都市は城郭で囲まれた都市国家として都市が誕生したといわれる。その後の春秋戦国時代には数多くの城郭都市（都市国家）が中原と呼ばれた黄河中・下流域を中心に次々に出現して互いに覇を競い合った。そのなかで都城は支配者の権威と権力を象徴する装置として，その立地やプラン，内部構造において，都城はこうあるべきだという理念がしだいに発達していった。都城とはすぐれて地上における大宇宙の表現であり，道教の神仙思想，風水の四神相応説，陰陽五行説などにもとづいてコスモロジカルな意味づけが行われてきた。中国の都城の理念は，「匠人営国，方九里，旁三門。国中九経九緯，経涑九軌。左祖右社。面朝後市，市朝一夫」という簡潔な表現で理想国家＝周に託して語られた『周礼』の冬官「考工記」や『欽定礼記義疏』の「礼器図」の「朝市廛里」などに具体的に凝縮される。

前漢の長安城，後漢の洛陽城のように，秦，その後の漢の時代に，都城の一つの完成した姿が出現する。地上の中心としての方形の平面形，碁盤目状の街路，都城中央部に置かれた壁で囲まれた宮都，都城の四周を取り巻く城壁といった要素をもつ都城が中国各地に建設された。そして唐はその長安城で都城の完成形を生み出した。日本や朝鮮半島，ベトナムなどでは都城の標準形として中国の都城プランを取り入れてそれぞれに都市を建設していくが，そのままストレートに受け入れたのではなく新たな理念を付け加えたり，もともとの理念を換骨奪胎してアレンジしながら，それぞれ独自の特色や理念をもった都市景観を各地に生み出し発展させていった。

第1セッションでは，中原に展開した古代中国文明の影響を強く受けながらも，それを巧みにアレンジしながら個性ある独自のものを生み出してきた朝鮮半島と中国華中地方の歴史都市の景観について報告をいただいた。

最初の楊普景先生（誠信女子大学校）の報告では，世界文化遺産にも登録された城郭都市である水原華城の建設の理念とその空間構造が論じられる。華城は18世紀後半に国王正祖の命により非命に倒れた父（荘献世子）の墓所を中心に建設された理念的計画都市である。そこでは「礼」という儒教的な秩序を都市に具現しようという伝統的価値理念により国王の権威を象徴すると同時に，進歩的実学者である丁若鏞に設計を命じてこれまでにない実用的な計画的城郭都市を建設させたという伝統と革新を調和させた点が華城建設の理念であることが指摘される。

二番目の李恵恩先生（東国大学校）の報告では，まず14世紀以来600年以上にわたり首都であったソウルの伝統的都市景観の特徴について，周囲が城壁に囲まれていたことから都市の拡大が妨げられ変化がほとんどなかったことが指摘される。そして19世紀以降のソウルの変貌について，日本の植民地時代，次いで朝鮮戦争の後の市街地の郊外への水平的拡大と土地利用パターンの変化から説明される。さらに1980年代のアジア競技大会とオリンピックの開催のためのインフラ整備を契機

に，高層のオフィスビルやアパートの建設が市内全域で活発に行われて土地の高度利用が進んだことで伝統的都市景観が大きく変貌したことが論じられる。

最後の鐘翀先生（上海師範大学）の報告では，まず中国の歴史的都市の全体像を捉えるためには，『周礼』考工記に説かれるような中原における都市建設の理想型だけでなく，他地域で生まれた多様な都市プランの検討も必要なことが指摘される。そして中国東南部の呉越地域の歴史的都市に見られる「夾城作河」構造が取り上げられ，その特徴と形成の要因が考察される。「夾城作河」構造とは都市に「外濠」と「内塹」という二重の濠が設けられ，それらが内・外の両側から城壁を囲繞する構造で，蘇州がその代表である。報告では呉越地域での「夾城作河」構造の出現について築城技術，地理環境の影響，交通上の必要性との関係から考察される。

東アジアの歴史都市の立地やプラン，内部構造，さらに景観における理念の共通性と多様性について，当たり前ではあるがこのセッションでの３つの報告と質疑応答だけではとうてい論じきることはできない。中国文明の影響を強く受けた日本やベトナムではどうだったのか，また内陸アジアではどうだったのか，知的興味はどんどん拡がっていくが，少なくとも日本の歴史都市の立地やプラン，内部構造について中国古代文明の中心であった黄河中下流域との比較だけでなく朝鮮半島やベトナム，長江中下流域以南の中国とも比較しながら考察することが求められよう。この会議をきっかけにして，歴史都市のプランや景観そしてそれらの理念について，地域や学問の枠組みをこえた国際的・学際的な研究や議論が活発に進められていくことが期待される。

（林 和生）